

林 淳・小池淳一編著

『陰陽道の講義』

嵯峨野書院 二〇〇二年一〇月五日刊
A5判 三七一頁 三〇〇〇円＋税

松 尾 恒 一

陰陽道や陰陽師はわからない、つかみどころがない、というのが現在までの私の正直な陰陽道観である。その理由の一つは、私が本研究分野の門外漢であるからであり、さらに儀礼や芸能史、民間宗教等、多少とも接点の有する領域に関心を持ちながらも、本分野に対する勉強を怠ってきたことが最大の原因である。

本書『陰陽道の講義』は、十五名の中堅、及び新進気鋭の研究者による講義の集成であるが、現在の陰陽師としていざなぎ流の太夫について講じた、梅野光興の講義（第十四講）の末尾は、本論からやや離れて抒情的に書かれた一節ながら、社会的存在としての陰陽師のあり方を考える上できわめて示唆に富むものに感じられた。

神祭りの終わりは、いつも祈願成就の宴席になる。いざなぎ流の太夫は、氏子の人々が歌い笑いさざめくのを尻目に、その途中でひっそりと退席するものとされている。太夫は氏子の代表として儀礼を執行しているのではなく、あ

くまで「雇われて」家や村の神の儀礼に携わっているのである。そのような所に、「職人」としての陰陽師と通じるものを感じてしまう。

私の陰陽師に対する不可解さをもう少し説明しなくてはならないが、私なりに理解している（つもり）陰陽師について説明すると、次のような属性を有する宗教者ということになる。

- ・ 国家レベルにおいては、古代奈良の寺院や、平安時代の六勝寺のような国家の経営する宗教施設を持たない
- ・ 国レベルにおいては、国分寺や鎮守社のような一国の神祭祀を行うための宗教施設をもたず、したがって地域支配と関わりを持たない
- ・ 郷村レベルにおいては、寺院や神社のような共同祈願の宗教施設を持たない

私の能力においては、まず寺院や神社、僧侶や神職との比較において理解を試みるしかないわけであるが、いざれも「……ない」といった表現で結ばれており、これでは何をするのが陰陽師なのか説明していないに等しい。梅野のいざなぎ流の祈禱師たる太夫についての指摘は、その一面に光を当てつつ、僧侶や神職とは異質な宗教者としての陰陽師を考える上で大きな手がかりとなるもののように感じたのである。

さて、四部十七講からなる本書は、陰陽道研究の現在の水準を充分に反映した良書であり、今後、私のような門外漢ばかりではなく、専門の研究者にとっても必読書となろう。各講義の内容については、次に目次を示すのみとして、要約的な解説は控えたい。なお、終講には各論考の概要が、今後の研究の展望

とともに整理されており、概説的な理解より研究へと進んでゆくための専門書としても活用されることが目論まれている。

第一部 思想

第一講「日本における風水と陰陽道」

鈴木一馨

第二講「陰陽道の形成と道教」

増尾伸一郎

第三講「天変と怨霊」

米井輝圭

第四講「安倍晴明の実像」

繁田信一

第二部 歴史

第五講「天文道と暦道」

―古代における成立の背景と役割―

細井浩志

第六講「都市―日本の都城とその思想的背景―」

脊古真哉

第七講「室町時代の陰陽道」

柳原敏昭

第八講「近世の陰陽道」

林 淳

第九講「陰陽師と山伏」

山本義孝

第三部 メディア

第十講「陰陽道から大雑書へ」

―近世近代における陰陽道の伏流化―

小池淳一

第十一講「おみくじ」

大野 出

第十二講「有掛絵」

矢島 新

第十三講「大衆文化と陰陽道」

―小説とマンガの世界から―

小池淳一

第四部 実践

第十四講「民間に伝わる陰陽道」

―高知県いざなぎ流を例として―

梅野光興

第十五講「陰陽師の活動」

林 淳

第十六講「木簡・呪符・人形」

鐘江宏之

第十七講「安倍晴明の「土御門の家」と晴明伝承」 山下克明

終講 収録論考の解説

本書は、陰陽道と陰陽師をテーマとする最先端を走る研究者による、現段階の研究水準を踏まえた啓蒙書であるが、通読してなお、陰陽道や陰陽師に対する不可解感には解消されなかった。

と一言でいうと乱暴なまとめ方になるが、変幻自在、玉虫色に変容をして各時代の精神に大きな影響を与えてきた陰陽思想や陰陽師の姿が、さまざまな視角より講述されることによって、浮かび上がってくる。自分の理解の及ばない、とらえどころのない鶴のような存在であることをはっきりと認識することもでき、安心したのである。

文化研究においてまず重要なのは、起源とその後の展開であるが、本書においては、第一部「思想」・第二部「歴史」、及び、第四部「実践」の第十六講「木簡・呪符・人形」、第十七講「安倍晴明の「土御門の家」と晴明伝承」において、日本において成立・定着した古代の陰陽道について講述される。重要な分野であり、従来からの研究蓄積がそれなりに存する領域であるが、近年、特に研究が深化しているようだ。

律令時代、陰陽寮という公的な機関において時刻や相地・方位の祭祀を管轄したが、ここに置かれた陰陽師や陰陽博士も官人であった。その思想は、古代中国の陰陽説や五行説を起源とすることはよく知られるところであるが、その思想と実践の典拠となった中国の風水書、道教典籍、仏教（特に密教）典籍等

書評と紹介

との関係が明確にされ、陰陽道成立の具体相がいつそう明解になってきた(第一講「日本における風水と陰陽道」、第二講「陰陽道の形成と道教」)。さらに、都城(平安京)の選定と運宮のための方位観念の形成の信仰・宗教的背景や、平安京という都市における律令国家体制下での時間認識・管理と天変災難に対処するための天文道と暦道についてもそれぞれ一講設けられ、より広い歴史的視野からの陰陽道理解がはかられる(第六講「都市―日本の都城とその思想的背景―」、第五講「天文道と暦道―古代における成立の背景と役割―」)。

王朝時代に活躍した安倍晴明は、その没後まもなくより伝説化し、近世、現代へと続くが、その同時代における実像が探られる(第四講「安倍晴明の実像」、第十七講「安倍晴明の「土御門の家」と晴明伝承」)。第四講では、『小右記』『権記』など、王朝時代の政治の中枢にあった貴族の記録によって、史実としての晴明像を描くことを目的とし、所期の目的を充分達しながらも、一方で、晴明とのかかわりが史実としては明確になっていない「式神」について一項を立て、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』等のしばしばあげられる説話資料に拠って論じている。啓蒙書としての一般読者へのサービスなのだろうが、伝安倍晴明像の呪縛からは現代においても簡単には逃れられないのだろうか。

ところで、八〇年〜九〇年代、古代・中世期の顕密仏教研究が急速に深化し、国家宗教としての側面についての理解が格段に進んだ。権門寺院は国家に関わる祈願を行い、特に密教は病氣・安産祈願といった個人の身体への祈禱を行った。これらの

寺院は、皇族や有力貴族が長官はじめ要職について、荘園経営や周辺の寺領化といった土地支配を行った。大勢の僧侶の奉仕する仏事の執行には莫大な費用を必要とし、それを支えたのが荘園や寺領であったわけで、土地支配と宗教活動とが不可分の関係としてあったのである。また、土地支配の宗教的な正統性の主張が土地の鎮守神祭祀であり、それゆえに、領民にアピールする大規模な祭祀を執行したのであるが(興福寺による春日若宮御祭り、延暦寺による日吉山王祭祀、等)、陰陽道はけっしてこうした道をたどることはなかった。

同じ時代、陰陽道は国家の命運を左右する天変や災難に対して卜占や、星辰の祭祀を行ったり(第三講「天変と怨霊」、あるいは、皇族・貴族に対する息災・延命の祈禱等、密教とほぼ同様の儀礼を執行した(第四講))。第七講においては、律令時代以降、室町政権下、特に義満時代には国家的な祈願を目的とする陰陽道祭が盛んに行われたことなど、陰陽道史の新たな一面が明らかにされている(「室町時代の陰陽道」)。しかしながら、陰陽道は有力貴族と結びついて地域を支配する権門寺院勢力のような存在になることはけっしてなかった。室町期における陰陽道の重用は、天皇の宗教的権威を構成する仏教と神祇信仰に対置させるためだったとの説明がなされるが(第七講)、これによって既存の寺社勢力が存在基盤の根底から揺るぐようなことがあったのだろうか。陰陽師の国家的祈禱とそれにとまなう地位上昇といったも、本書の成果による限りでは、基本的には、安倍氏・賀茂氏といったいくつかの陰陽師家内部の問題を出ることはなかったようにうかがわれる。

私の認識では、この十年間を見ても、顕密仏教・寺院史研究と陰陽道研究とが、ほとんど没交渉に行われてきたように感じる。すでに、仏教・寺院史研究、陰陽道研究の双方が、互いの研究成果を援用するといった段階を超えるべきときにあるのではないだろうか。一次資料に基づいて仏教・寺院史、神祇・神道史と、陰陽師・陰陽道史を包括的に研究し、理解することを目指すべき段階にあるように思われるのである。

近世期、陰陽道や陰陽師は、古代・中世に国家の中枢部にあって公的な祈禱に奉仕していたのとはまったく異なる相貌を見せる。第八講「近世の陰陽道」、第九講「陰陽師と山伏」においては、唱聞師や万歳等と土御門家に代表されるような、民間陰陽師とこれを支配する本所の組織や活動についての実態について講述される。幕藩体制化において、土御門家が吉田神道の影響等を取り込んで神道化してゆく過程や、勢力範囲を広げるために僧侶・修験・神職までも配下に置こうと争論を起していたこと、一村内に修験・陰陽師・万歳等が混在する場合には、本所の利害の絡んだせめぎあいにより、次第に階層化されてゆくことなど、多くの新知見が示される。

近世の庶民の生活と精神に与えた陰陽道信仰については、主として第三部「メディア」で講ぜられる。本書の特徴的な一括りで、陰陽思想を流布の原動力となった書籍や呪符・絵画のほか、現代のマンガ文化に見られる陰陽道・陰陽師までが取り上げられる。

第十講「陰陽道から大雑書へ」は、安倍晴明撰と伝えられる陰陽道書『篋簋』が、古浄瑠璃『信太妻』や仮名草子『安倍晴

明物語』を生み出す原動力となったこと、特に『篋簋』を再編した書ともいえる『大雑書』は日常生活のレベルで活用されたこと、その範囲は南西諸島にまで及んで、場合によっては地域の守護神祭祀に関わるといった独特な民俗的な活用の例まで見られることなど、陰陽思想が『大雑書』を通じて近世民衆の生活・精神文化に深く影響を与えていたことが明らかにされる。なお、「メディア」に配されている本講について欲をいえば、国文学研究において進展しているものと推測される近世の出版・流通状況の実態に触れつつ、その影響の深度や地域的な広がり等について言及して欲しかった。

現代では女性誌・週刊誌には星占いがつきものだし、個人で行うカード占いや、九星術も特別な行動とはいえない。しかしながら、古代以来祭祀は、神・仏を分けず、共同体が共有する関心事、公的な事柄について祈願する共同祈願を基本とし、それは程度の差こそあれ全体としては共同体の支配者に、神仏等異界と関わる限定的な部分については宗教者に占有されてきた、と私は考えている。したがって、一般民衆が、しかも個人単位で神意を判ずるのは、長い祭祀の歴史を眺めれば、その展開の最終段階にあるのではないかとさえ考えるのであるが――今後、インターネットなど新しいメディアによる質的な変化はあり得るだろうし、また薬物や医療の応用などによる「異界」との交感を心理的に体験させるような技術もでてくるだろうが――、そうした点で、庶民が個人単位で神意を判ずるような行為が、歴史的にいかなる様相で現れてくるのか、大きな関心がもたれるのである。

書評と紹介

第十一講「おみくじ」は、こうした疑問に対する解答に大きな手がかりを与えてくれる興味深い講述である。むすびの一節に「未来を知ろうとする方法は、時代や地域によって、さまざまに異なってはくるものの、未来を知りたいという欲求は人類共通のものであり、…」とあるように、筆者の関心はまず第一に、未来予知に対する欲求の通時代的な共通性に向けられているようだが、私としては、共同祈願といったあり方から個人による自身のための占い、といった歴史上の断層にも目を向けて欲しかった。

第十二講の「有掛絵」とは、幸・不幸の時期を示すとされる陰陽道説を絵画化したもので、作者や図像について分析がなされる。これを贈答する興味深い習俗のあったことも記されるが、陰陽思想の庶民レベルでの受容を考える上で、さらにその使用——贈答の場合の、贈る者と贈られる者の関係、購入したり、贈られた後に飾られる場所、等々、——についての考察が期待される。

近世期の陰陽師の活動については、第二部第八講で近世の陰陽師の組織や存在形態を講じた林が、第四部「実践」の第十五講「陰陽師の活動」にて、土御門家の朝廷・幕府に対する祈禱奉仕や、民間陰陽師の芸能や病氣治療の祈禱の実態について講ずる。関連の林の講義で興味深いのは、本講とは別に書かれるコラム「陰陽師復活？」で、明治新政府による陰陽師の処遇が記される。陰陽師は、僧侶・修験者のように教導職につく道を封ぜられたことが紹介されるが、ではそのとき陰陽師が生きていくためにいかなる道を模索したのか？ 興味をかきたてられ

る問題である。

あいまいな記憶によって語るのを許してもらえれば、戦前に小学校で書かれた作文で、父親が家に注連を張り、お祈りをしているからといってなぜ差別されなくてはならないのか、と泣く思いで切実な訴えを記しているのを目にしたことがある。この父親の職が陰陽師であったか否かも記憶は定かでないが、「陰陽師を生きる」といったことはどのような人生を選び取り、あるいは強いられることだったのか、近世く近代の歴史学及び民俗学分野の専門家には、彼らの日常生活を含んだ活動をトータルに追及してほしい。

*

*

*

寺社の儀礼についての研究を多少とも行ってきた私の立場から、一読した際に不思議にも、多少の不満にも感じたのは、祭祀についての本尊の形態や祭壇・御幣等の祭具、供物、祭祀の次第内容について、ほとんど解説や概説がないことであった。状況に応じて柔軟に対処するのが陰陽道祭祀の特徴であると考えれば、祭儀についてのスタンダードも存在しないのが陰陽道儀礼というものなのかもしれないが、祭祀空間や作法次第に、神霊観の具現化が認められる場合も多く、各時代の典型と目される事例について紹介などがあつたらと感ずるのである。

一時代が終わって消滅したかと思いきや、次の時代にもまったく異なる相貌を持つて現れる——陰陽道や陰陽師についてのこうした漠然とした印象は、本書によって、確信に変わったが、それはそれぞれの優れた興味深い講義ばかりでなく、専門書であつたら困難であつたらう「メディア」「実践」といった特徴

的な編集、構成に負うところが大きいように思う。

本書のいくつかの講義は、「陰陽道」といった括りの論考としてふさわしいのか疑問に感じるのと同時に、マンガ・映画等を含む現代的状态の中で、陰陽道・陰陽師を緩やかに、そして結果として深く理解する上で、すぐれた論考であることも充分認められるものである。

本講義の一つ一つが、大学学部の専門課程／大学院修士課程における通年一科目分に充分値するもので、「専門的かつ本格的な陰陽道研究への入門書」（「はじめに」）といった編集の目的は十二分に達せられている。

不肖ながらも、本書の全講義を履修した一受講生の願いとしては、紙上講義ばかりではなく、できれば指導付、関連の史跡踏査等を含む、生の講義を企画して欲しいということである。研究成果を一方的に教授するといった段階より、関心を寄せるだれとでも資料と研究を共有して、対話する、といったことは言うは安く、実践の難しい営みであるが、マンガ・映画までを射程に収める視野の広さを持つ、本書の編集者及び研究者の面々であれば、また、陰陽道を通して精神世界に大きな関心をもたれている今こそ、可能であろうと期待するのである。

白川千尋著

『カストム・メレシン』

—— オセアニア民間医療の人類学的研究 ——

風響社 二〇〇一年一月二〇日刊
A 5判 二四一頁 六〇〇〇円＋税

東 賢 太 朗

書評の依頼を引き受ける一年ほど前に、評者は本書『カストム・メレシン』を、フィールドワーク先のフィリピンのとある地方都市で読了した。呪術や呪医に関する自らのフィールドワーク経験と重ね合わせながら読み終えた後、評者は本書を、「他者」の行いの「リアリティ」を「民族誌」として描く上で、模範となりつつも乗り越えなければならないモデルとして切実に受け止めたことを鮮明に覚えている。

本書はすでに、二人の医療人類学者による書評がなされており、そのこと自体、医療人類学の分野における本書の重要性を示すものであると考えられる（池田光穂「書評・白川千尋著『カストム・メレシン——オセアニア民間医療の人類学的研究』」『アジア経済』第四十三巻第七号、二〇〇二年。星野晋「書評・白川千尋著『カストム・メレシン——オセアニア民間医療の人類学的研究』」『民族学研究』第六十七巻第四号、二〇〇三年）。本書は、「西洋医療と民間医療をそれぞれ独立した体系と位置づけ」てきたこれまでの民間医療に関する人類学的研